

令和6年度学校教育教員養成課程

(学校推薦型選抜Ⅱ型)

小学校教育専修家庭科教育コース

中学校教育専修家庭科教育コース

小論文

表紙

[解答上の注意]

1. 試験開始後、表紙1枚、問題用紙1枚、解答用紙1枚、下書き用紙1枚があるか、確認しなさい。
もし、欠落のある場合には挙手して、そのむねを申し出なさい。
2. 解答用紙の受験番号欄に、受験番号を忘れずに記入しなさい。
3. 解答は、指定された解答用紙に、指定された文字数で、横書きで記入しなさい。
句読点も1字に数えます。
4. 解答用紙の太線  部分には、何も記入しないようにしなさい。
5. 試験終了後、解答用紙を回収します。(全1枚)
表紙を含め、問題用紙、下書き用紙は各自持ち帰りなさい。(全3枚)

令和6年度学校教育教員養成課程

(学校推薦型選抜Ⅱ型)

小学校教育専修家庭科教育コース

中学校教育専修家庭科教育コース

小論文

問題用紙 全1枚

問題 次の文章を読んで、設問に答えなさい。

建築を、企画から始まって設計・施工・運用・廃棄、そしてふたたび企画に戻る一連のプロセスとみて、このプロセスにかかわる人々を大きく二分すれば、「つくる側（建築設計・施工ほかのさまざまな専門家）」と「つかう側（住まい手）」ということになる。

「つくる側」の思い描くイメージと「つかう側」の思い描くイメージとは互いに重なり合うべきだが、そのような例は実のところあまり多くはない。その結果として、日射や風・外気温湿度変動など、身近な屋外環境にあるさまざまな自然のポテンシャル^(注)を活かして室内環境を調整する建築—自然共生建築あるいは環境共生建築・エコロジー建築と呼ばれる建築—を、「つくる側」はつくったつもりだったが、その特長が「つかう側」によってうまく引き出され得ずに、つかう側（住まい手）はその室内環境を不快に感じてしまい、環境調整のための化石燃料使用量がかえって増えてしまう例は少なくない。最も具合が悪いのは、それが故に、住まい手が自然共生建築あるいは環境共生建築・エコロジー建築と呼ばれる建築を嫌いになってしまう場合である。筆者は少なからず、そのような場合を耳にしてきた。

以上のような状況が私たちの社会の中で何年も続けば（すでにかなり続いてきているとの見方もあるだろう）、建築環境や都市環境の分野における地球環境問題やエネルギー資源問題は、解決の方向に向かうどころか、むしろ問題の難しさが増す方向へと向かうことになってしまう。

住環境教育は、専門家・非専門家の双方に対して等しく必要であり、しかも両者が教育の結果として得られる知識（望むらくは知恵）を共有できるようにすることである。住環境教育は、身近な環境の成り立ちを自らの体感に基づいて知ることにより、環境づくりが「手入れ」によって行えることを実際の経験を通じて知り、そのことを街づくりや地域づくりへと展開していけることを専門家・非専門家が自ら発見しながら実践を確実なものとしていくことが大切だと思う。

（日本建築学会編『環境教育用教材 学校のなかの地球』技報堂出版、2007年による。表記を一部変更した。）

（注）ポテンシャル（potential）：可能性、潜在（能）力、潜在資源（『ジーニアス英和大辞典』より）

問1 上記文章の下線部にある「自然のポテンシャル^(注)を活かして室内環境を調整する建築」とはどのようなものか。日本の伝統的な住居の中で、「つくる側」が工夫している具体例を挙げて、200字以内で述べなさい。

問2 今日の住まいにおいて、住まい手は自然のポテンシャルを活かしたつかい方ができているか。本文をもとに「つかう側（住まい手）」の現状を述べ、住まい方をいかに工夫するとよいか、具体例を挙げながらあなたの考えを400字以内で述べなさい。